



上の20世紀～21世紀終盤の渇水頻度変化と洪水頻度変化は、1901～2000までと2071～2100を比較したもので、いずれも沖・黒グループ資料（平林由希子博士製作）によるもの。両図を重ねてみると、アマゾン周辺、インドシナ半島周辺、西アフリカ周辺などのように、渇水も洪水も増加して、水のマネジメントが、いよいよ難しくなる地域が見られる。

クールにホットな2107

100年後の地球はどうなっているのでしょうか。映画「不都合な真実」などを地球環境の悲観論と受け止める人もいますが、今は懐かしい「バラ色の未来」という響きに希望を託してみたい気もします。

私たちはこれから、未知のこと、予測不可能なことという、社会的合意が得られにくい事柄にも、取り組んでいかなくてはなりません。それは、説得力のあるシナリオで描いた未来を自分の子供や孫の世代にバトンタッチしたいからです。

夢を現実に近づけるのが「科学技術」であるのなら、科学や技術に携わる側も、その結果を享受する私たちも予測の正確さを競うだけでなく、目指すべき社会像を明確にし、元気になるシナリオを描く必要があります。そのときに

「循環型社会のモデル」とか「自然と人間が共生していた時代」といわれる江戸のシステムが、案外役に立つのかもしれない。

単なる懐古趣味ではなく、バックキャストイングの視点で100年後をつくるための道具として「江戸シナリオ」を効果的に使う。それは、水と豊かなかわりあいの中で文化を育んできた「日本」が今、世界で果たせる役割なのではないでしょうか。

「バックキャストイング (backcasting)」スウェーデンの環境NGOであるナチュラル・ステップの創始者であるカール・ヘンリク・ロベールが提唱した手法。最初に未来の望ましい社会像を定め、それを実現するために、なすべきことを選んで予測しようというもの。

水の文化26号 2007年7月 特集「クールにホットな2107」

健全な水循環を育んだ稲作漁撈文明の知恵	気候変動の文明史	安田喜憲	4
自然との共生で取り戻す健康と安全	異物を排除する衛生感	藤田紘一郎	10
人口予見と食糧生産量の推計	食糧危機は本当か	川島博之	14
自然科学への新たなアプローチ	問われる科学者の感性	小笠原敦	18
高騰するエネルギーと水資源	100年後どうなる、どうする水文化	沖大幹	24
良い建物を都市に残す仕組みとしての	定期借地権と区分所有	近角真一	30
水の文化実習実践取材	マイカーから公共交通機関へ	編集部	38
みずだより	お天道様のエネルギー	北野大	44
文化をつくる	新江戸シナリオの可能性	編集部	46
水の文化書誌	明治が画いた夢	古賀邦雄	48
ミツカン水の文化交流フォーラム2007			50
インフォメーション			51